

死や戦争 苦悩の中で表現



受賞作
「雪の偶然」

2015年から22年夏にかけて、ウクライナ侵攻や母の死など「死」とは何かを鋭く問いかけ、日常や不穏な時代を思索的に見つめた555首を収録。23年3月25日発行、現代短歌社。

ちようくう賞
遥空賞

歌壇の最高峰とされる賞。歌人や民俗学者として知られる釈遥空(本名・折口信夫、1887〜1953年)にちなみ、1967(昭和42)年に創設された。角川文化振興財団主催。選考委員は歌人の佐木幸綱、高野公彦、永田和宏、馬場あき子さん。賞金100万円。本県関係者の受賞は2008年の伊藤一彦さん、21年の俵万智さん(当時宮崎市)に続き3人目。

吉川宏志さん 遥空賞

短歌界の最高峰「第58回遥空賞」に、日向市東郷町出身の歌人、吉川宏志さん(55)＝京都市＝の第9歌集「雪の偶然」が決まった。現代社会を鋭く見つけた歌集を次々に刊行し、歌壇を深めた今回の受賞作は選考委員から「幅広い領域で秀歌を生み出す」と評価された。受賞の喜びや創作への思いを聞いた。(生活文化部・大谷美穂子)



母校の宮崎大宮高を訪れ、図書閲覧室で自身の歌集を手にする吉川宏志さん(猪俣重俊撮影)

闇を引き寄せた社会詠

改めて受賞の感想を。歌を作る者として目指してきた最高峰の賞。特に今作が評価されたことが非常にうれしかった。「雪の偶然」は、死や戦争など非常に重いテーマや、母の死や退職など大きく変化した生活の表現に挑戦した。悩み、苦しみながら、夢中で歌を作ってきた日々と作品が認められたことが、本当にありがたい。「雪の偶然」で悩み、苦しい点とは。「慰安所の扉に続く列がある。水溜まりを避けて途切れたる列」へキウに居る我をおもえり眼鏡がまぶ砕けて見えぬ銃口に向くくなど、戦争を多く詠んだ。単純に戦争を批判するのは簡単だ。だからこそ、戦争に直接関わってはいないが、自分がその場にいららざるのかと深く考えることをテーマにした。「戦場にいたら、もしかしたら悪に加担したのではないかと自分をみつめた。資料を読み込み、沖繩などの現場にも行って人々の話も聞き、その上で闇の中に深く入り、闇に自分自身を寄せていく作業の繰り返し。精神的にも非常につらく、一番大変だった。今作では社会詠の鋭さが光る。例えば、森友学園の決算文書改ざんを苦に自殺した財務省元職員についての連作で、「罪を押しつけ逃れるものに災いのあれよとおもえど災いは来ず」という一首。そして、歌集最後は安倍晋三元首相の暗殺の連作だった。「安倍元首相に対し、私自身はずっと批判的だったが、こういう形で亡くなったのはとても悲しかった。この歌も当時はまったく意図していなかったが、今振り返ってみると実際の事件とつながっているように自分でも驚いている」

「以前、新聞社から政治について取材を受けた際、『詩歌では、何か起きる前の予感や予兆が表現される。その言葉を聞くのが大事だ』と言われ、今も強く印象に残っている。歌を作った時は分からなくても、時代の空気を敏感に感じ取り、予兆を言葉でリアルに表現することは、短歌の重要な役割だと感じている。無力だから言えること。短歌の役割とは。「歌で社会が変わるわけではない。ただ、言葉として残すことが大事だ。50年

高校時代の恩師で歌人

志垣 澄幸さん(90)＝宮崎市



祝福の声

吉川宏志さんとの出会いは、彼が15歳の時。私は宮崎大宮高の教員で、国語を3年間教えた。よく覚えてるのは、夏休みの読書感想文だ。1年次から構成力、表現力ともに抜群で、あれほど素晴らしい文章は、長い教師人生で後にも彼一人だった。

人だった。

日常詠に新たな円熟味

人が気付かないような細やかで何でもない景色を鋭い視点で切り取り、一つの発見を見いだすのが吉川さんの強みだ。ただ、「雪の偶然」では、家族や日常のことをありのままだが非常に豊かに詠んでいる。そこに新たな円熟味を感じた。この先、吉川さんはさらに深化し続けるだろう。そして若い歌人もどんどん育て、大きな仕事を成し遂げてほしい。期待している。(談)

言葉を残し、何かを変える

前の歌を読めば、その時代の空気がまざまざと見えてくる。現在より、将来にその意味が生きているのが歌ではないだろうか。また、読んだ人の記憶に残れば、その人の何かが変わるかもしれないと願っている。「福島のアウシュヴィッツ平和博物館にある子どもが描いた絵を見て「幼な子が見しものは絵に残されたりつらかったりする重要な場面では、細部に着目することで気持ち落ち着き、臨場感を生々しくも冷静に伝えられるのではないか」

「世界情勢や日本社会はさらに危うさを増し、私自身も不安感や怖さを感じ性ではないだろうか。歌は無力かもしれないが、だからこそ言えることがある」

「出身地が同じ牧水はやはり大きな存在。SNSを中心にした今の短歌ブームでは、声には出さず、目や手から実際に会い、刺激を受け合ってほしい。考え方の違いを感じ、なぜ違うのかをまた考える。その経験が表現を豊かにしてくれる」(宮崎市・宮日会館で)

「宮崎では短歌を詠む若い人が増えており面白い。ぜひ、同じ地域にいるのだから実際に会い、刺激を受け合ってほしい。考え方の違いを感じ、なぜ違うのかをまた考える。その経験が表現を豊かにしてくれる」(宮崎市・宮日会館で)



言葉で表現する大切さを語る吉川宏志さん(竹内夏海撮影)

吉川宏志さん略歴

- 1969年 若山牧水と同じ日向市東郷町に生まれる。3歳まで過ごし、父の転勤に伴い宮崎市に移る
- 87年 京都大文学部へ入学。宮崎大宮高時代の恩師の志垣澄幸さんに紹介され、永田和宏さんに出会い短歌を始める。短歌結社「塔」へ入会
- 94年 「妊娠・出産をめぐる人間関係の変容」で第12回現代短歌評論賞受賞
- 95年 第1歌集「青蠅」刊行(第40回現代歌人協会賞)
- 2005年 第3歌集「海雨」刊行(第11回寺山修司短歌賞、第7回山本健吉文学賞)
- 15年 永田和宏さんに代わって「塔」主宰に就任
- 16年 第7歌集「鳥の見しもの」刊行、県出身者として初めて第21回若山牧水賞を受賞。同作は第9回小野市詩歌文学賞にも選ばれた
- 19年 第8歌集「石蓮花」刊行(第70回芸術選奨文部科学大臣賞、第31回斎藤茂吉短歌文学賞)
- 23年 第9歌集「雪の偶然」刊行
- 24年 同作で第58回遥空賞の受賞が決定。第10歌集「電のほとり」を7月刊行予定